
11-12

阻止米訪藤佐
斗争報告總括

1967. 11, 30

發行 — 界反戰青年委員會

た反打手羊と展開しなれぬならなり。また現在
在の段階において、或は過去に引いたような手
羊のスタイルでは対応できない。然るに情状が生まれ
て来た。この辺で、何かと思つた。

その小はブルジョアシイが民主主義の階級とつた
ついた。田舎に於いても暴挙を働き、一々田舎の権
利である示威運動に対する国家権力を保つた態度
した。しかも暴力的な態度。10、8羽田手羊に於
て、学生山崎君の危機。これはもはやブルジョア
が、労働者人民の反打手羊などに、聞く耳もたぬ
という全くファシイ的な態度に、なつてしまつた。
このことである。

このようなブルジョアシイと国家権力が一体となつ
て、労働者人民の当然の権利である示威行為を不許
すに、徹底した弾圧をかけることになつた。ブル
ジョアシイ自身の侵略政策と支配体制を維持維持
しようとして、従つて全学連や反打手羊委員
会の戦う的なデモは、ブルジョアシイの海外侵略政
策、一々国内反動と配件制強化を暴露する、と、そ
れ、警察権力をばいじり、さういふ国家権力の階級性を
全人民の前に暴露し出すことになつた。さうして、

な労働者、学生、人民をこの手羊に立ちあがらせ
る。さうした手羊として、10、8羽田手羊、山
崎。

或は博反戦そのような態勢を行つた。11、12羽
田手羊に引いて取り進んで来た。

11、12羽田手羊に於ける場 反戦のその日の行動

東京駅に着いた時は、従来の雨の降つた降り降り
いた。日電が東京駅から三ツ目の紅葉原駅付近
の紅葉原でスリキョーブル等々の他の細かい注意
事項を打ち合せ、函が東京に戻り、昼食、雑用4
を済ませて、全日反戦の集會場である。日比谷公
園に集會した。我々博反戦が公園に到着した時
は、公園に入つたのは、靴を脱いで、身につけた官氣が立
ち並ぶ威圧的の裏切の光景を呈して、いた。

公園の前では、構成員の学生が集會を聞き、少し離
れた野外音楽堂前では、各地の反戦と取場反戦のガ
ル、10、6集會を聞き、集會を促して、ナツハ服
を身に付けた田舎者、漁者が、赤旗を先頭に、シゲガク
デモと、阪上野木出止のシヨビ、コリ、コリで公園

し、先着部隊の相手と、喋りか、迎へられた。

博反戦、反打手羊、吹田反戦、高槻反戦、

坂下反戦、等が、いよかたまりになり、各隊

の、川、河、上、新米阻止、羽田手羊取り、組、

に、対、する、経過報告、派、派、表明、を行、い、シ、

ガ、デ、モ、を、全、隊、の、集、會、場、に、あ、る、野、外、音、楽、堂

に、入、場、した。

死人どかベンチを全隊の反打手羊等に結

集した。陣中、埋め、た、兵、場、は、熱、気、に、逆、水

を、ト、詠、刺、に、行、つ、つ、着、身、筋、筋、筋、の、怒、り、と、手、

に、対、する、意、見、の、派、が、み、な、ま、つ、て、り、た。

全日反戦、半、日、向、左、の、接、接、に、つ、つ、さ、許、大、団

の、選、出、が、行、わ、れ、社、会、党、青、年、向、左、小、野、氏

社、会、党、日、本、運、動、の、衣、井、副、長、三、星、敏、彦、参、事、

反、打、手、同、盟、式、派、等、が、一、さ、つ、か、に、壇、上、に、立、ち

11、12手羊の集會と派、派、表明、を行、い、て、

博、反、戦、デ、モ、コ、ー、ス、は、日、比、谷、公、園、の、新、橋

駅、ま、で、この、向、シ、が、デ、モ、を、ヤ、フ、ラ、ン、ス、

デ、モ、を、つ、つ、た、新、橋、駅、が、一、旦、流、水、橋、

築、電、車、で、六、甲、上、手、に、向、つ、た、愛、手、の、内、は、反

戦、の、メ、ン、バ、ー、に、超、過、量、で、あ、る、六、甲、上、手、

に、着、き、新、橋、田、が、ら、い、と、ク、リ、ナ、シ、ヨ、ナ、ル、

い、な、が、ら、カ、コ、の、結、集、場、に、あ、る、多、摩、川、の、河

原、に、結、集、した。

この、地、と、ら、我、々、は、羽、田、に、結、く、5km、の、道、程

り、を、整、理、し、た、一、カ、モ、反、打、手、性、の、あ、る、デ、モ

を行、つ、た、羽、田、空、港、に、結、く、産、業、道、路、へ、出、る

さ、う、の、道、路、は、官、業、の、海、は、み、え、な、か、た、産

業、道、路、へ、5、6、10、m、手、の、道、路、は、持、動

隊、を、運、入、の、車、が、3、4、台、並、べ、し、ま、つ、た

ない、労働者も断平やるべきだ。

警官は四、五千、反戦青年、社寮同として労働者等を合めるとして千人程もいるのに、指揮者は警官とくらひ合つた時点を解散等と口走つた。このことに怒つた反戦青年、又そのデモに参加していた人々は、「佐藤を見送りに来たのではない、阻止しに来たのだ」とめいめい口にした。それから行動に移つたのである。

警官隊とデモ隊の衝突、この時には自分は死んでもよいという、一瞬のような気持になつた。しかし、一部の反戦者となえる人が口知つてしまったので、警官につまみ合つた時、大鳥居まで行かずには中公園手前の道にデモ隊を誘導されたのである。あの警官とくらひ合つた時に、指揮者は何故学生が状況報告を行つてくれなかつたのか。又、状況報告をしてくれなかつたら、どうして自分達が動かさなかつたのか、後で後悔している。もし、大鳥居で学生が戦つてゐる等という情報が入つていたら、どうしてこの血を流してゐる学生に戦いに参加しては行かない。

11. 12 羽田斗争に参加して

海を渡る

一 佐藤首相は今回の訪米の中で次のように事を明らかにした。
① バトナム問題では、アメリカの北バトナム爆撃を認め、同時にアメリカのバトナム戦争を明確に支持すること。

② 沖縄問題では、沖縄にある米軍基地が日本と極東の安全を確保保障するためになくてはならないものであること、したがつて沖縄返還はバトナム戦争が解決したとされるであらうと六年以後に日本で協議されるべきこと。

③ 日本の自主的防衛力の強化と日本が協同して日本と、極東アジアの安全をはかるべきこと。
二つらを見てもらうように、今回の訪米は、バトナム戦争に日本を加担させるばかりでなく、日本を含めた極東アジアに対し、侵略と抑圧を

学生はスル新等で「一部学生の暴走しなどと書かれてゐるが、現に労働者も戦つてゐるのであつて、学生をいふがいに悪いと報道するのはよくないことであると思つ。又、国民の一人一人がもっともって現在の日本の国々どのような状態にあるのかをよく知るべきであると思つ。

僕達、反戦青年は、今日日本がこのような状態におかされてゐることを多くの人が分つてもらつたために、運動を展開していかねばならない。その為にも今までよりもっと学習していかねばならない。そして、このことを現場においてやるべきである。

今の状態では、僕達の取組は、ただ「バトナム戦争反対、エンタープライズ、原潜密発反対」等といったことを全賣通のスピーカーに掲げているが、実際には一部の人がこのような運動を行っているだけである。

その為にも、青年行を集めて学習会をやるべきであると思つてゐる。

以上

日本を侵略して来る兵隊を殺してやるべきだ、と叫ぶ。その時、佐藤首相のバトナム訪問阻止運動は、全学生と市民の怒りをこめて、あつた。

佐藤首相は、佐藤のバトナム訪問に対し、反対の意思を、さきと世界に表明し、直接的打撃を与えた。それは同時にアメリカのバトナム戦争の段階的に入カレ、日本との段階的バトナム戦争参加に誘ふことと、後退してゐる状況の中で僕らに新ためてバトナム戦争反対の問題をきつた。すでに見たように今回の佐藤訪米のもつ意味が云つても僕らは再び座視することはない。

二、僕らは海反戦の集本会の中で、全口反戦青年委員会が佐藤の訪米に反対する羽田斗争を呼びかけてゐるのを知つた。バトナム反戦を討論する戦場の佐藤よりの中で、海反戦に参加した仲間とともに、今回の佐藤訪米にたいし、何をなすべきか提記した。その討論の中で、佐藤の訪米を再び

見すごすのではなく、佐藤の訪米に反対する諸活動に取りくむこと、又佐藤訪米阻止の羽田斗争にはカンパで代表を送ることなどが多数の意思によりて定められた。たゞし中には全口反戦のよる組織が呼びかけた斗争には信頼して参加することはお出来ないという強硬な意見もあった。

取場での羽田斗争代表派選カンパ活動はわずか二日間ではあったが、七、二〇日のカンパが集まらずして僕が羽田斗争に参加することになった。

三、東京（は）二日の夜行で立ち、先ず二日正午から行われた、総評青年部を中心にして組織織さ取っている全口反戦の集会に参加した。集会には日比谷の野外音楽堂をうめつくす青年労働者や全口から集った。一時半新橋駅まで官庁街の中心を通ってデモした。遠まきにした警備官はデモに圧倒されてた。官庁街の上ムラと巨大通りのジクザグデモをたゞ見ているばかりであった。デモはつづいて電車で羽田空港の近くへ移動した。おれた駅では羽田空港方面の電車は全厚運の行動隊

10.8、11.12斗争

山崎君のギャク殺から反戦斗争が始まったかのような一般市民が受け取った、10.8斗争によって、あの日、本来既成政党が先頭に立ってやるべき斗争を、全厚運、反戦青年委員会の組織によって佐下訪米トを阻止すべく斗争へと発展した。だが、ここで一般市民は新しい局面にぶつかって今まで既成政党におきかかってスケッチール斗争を消化して、大運動から戦術的、歩行者、学生、今までのウク内から受生の場合にはちがう新しい運動の方向へと転起せざるを得ない状況へと進んで来たのである。

だが、10.8斗争で記憶しなければならぬのは、自ら前衛党と証する日共が10.8斗争は反動分子と反革命分子の衝動と、狂弁して、何ら適格な評価をなし得ない（四、一セストでもとつてある）日共を、このまま放っておく事は僕自身、いや反戦青年委員会として見まがすわけにはいれない。

との事によって不運に陥っていた。5.15のほどデモして空港からはずり口の位置にきたが、途中、歩行者の他のデモとすれ違い心強く感じた。四當日はデモが空港からはずり口以内で止つて禁止されていて佐藤が出席する時刻には前方の道路をひたひた行動隊以外には何も見ることが出来なかった。デモの権利が60年安保のころに較ぶって大巾に制限が加えられており、デモの権利を争うしようとするには何かが感じられた。なにより近頃、全厚運の仲間と行動隊の衝突がくりかえされてくるのを感じながら、行動隊と歩行者の時間対峙していった。その後、行動隊を排除してデモを完遂した。しかしながらこのデモは警備官による制限と阻止のため、全口空港に近づくことさえ出来ず、不本意なものであった。それに比べて、あつた全厚運を合の二万数千のデモは佐藤の訪米に反対する日本の中の強固な意志を表明した。又佐藤の訪米に打撃を与え、今後の斗争の前進を確信した。

電気工事工、K.T.

だが、ここで見つけなければならぬのは、日共の下部組織である民青である。僕は民青の下部同盟者である人たちは皆どうでもない（僕も民青員である今は出席 不参加）中には真面目に歩行者の将来を考えているものもある。だが今下部の民青員は上部の民新によって、今度の斗争は、トロツキストと反動セイルの排突であると流して、信じている同盟員が、かなりおるであろう。ここで場反戦として考えなくてはならない！

これは民青だけの問題でない。総評をなし得なかった、未組織歩行者の法皇である。本来一番苦められているのは、流れ作業的歩行者ではなく、人として歩行者であるかどうかが？ この問題も考えなければ、反戦斗争の進展も、半減されるのではないか？

11.12斗争及び我々は今後何をすべきであるか？

10日以後、官憲の強行な弾圧にもかかわらず、反戦
斗争は11日の由比さんのショックな焼身自殺の
佐藤首相はミマイ金でもってこの真相をボカスと
いう資本主義特有のやり方で片すけてしまったが、
11日佐藤訪米阻止斗争へと発展して行った。だが、
僕達は、10日斗争に見られたように、佐藤の訪米ト
を阻止しようとするのなら、力と力の対決という
状態が現われても不思議ではないように思う。

だが、11日は力と力の対決ではなく、対戦術的な
状況が生れて来たのではないかと。国家暴力団は初
めから、催涙煙をばっつけてデモ隊を阻止しようと
した。学生は必然的に自分を守るために、ヘルメッ
ト、棒切れを持った。武装した警官隊の猛烈な弾圧
を前にして、学生たちはひるまなかつた。

何故であらうか？

曰夫、社会党なら11日に官憲の弾圧はきびしかつた
としてお祭をにぎすであらう。へいや、このようにな
斗争は絶対やらない。11日に、学生や戦術的
作戦の反戦青年委員と違つた点がある。

そして、学生は、沖繩が米軍に代つて自衛隊の戦
略基地にされることを条件に返還しようとする首相

11・12羽田斗争の報告

(1) 我々はなぜ羽田斗争！佐藤訪米阻止に立ちあ
がったか

佐藤訪米の目的は、既に「環反戦討議資料」で
明らかにされていたように、アメリカのベトナム
侵略が、ベトナム人民の英雄的抗戦の前に、重荷
となる状況の中で、東南アジアにむけてこの教訓
を、大規模な経済的進出を行つて来た日本資本主
義が、それを支える政治的支配にのりだす第一歩
として東南アジアにおける日米関係を調整するた
めである。日本の支配階級は東南アジア支配の爲
に、日米帝国主義の共通の目的である東南アジア
人民の解放運動の抑圧を、日米共同で行う中で
日本帝国主義の侵略の基盤をかためようとするも
のである。これがもたらす結果は**非難**、ベトナム
への侵略への一石の加担であり、それはすでに訪米
トによる傀儡政権への公式支持としてあらわれて
おり、訪米において日本政府の名による米ベトナム
侵略への公式支持を表明し、ベトナム参戦口化
を公言するだろう。沖縄問題もこの線にそつて取

の訪米に抗議して斗つたのである。又、首相は、
「米国の立場に対する支持を表明することにも、
できる限り、平和探究に努力する」との日本の姿勢
を再び確認した。首相は、また北爆の停止にはハ
ノイによるそれに対応した措置が期待されるべき
であるとの見解を表明した。11日新聞夕刊しと
言われるように、今回の訪米によって「日米帝国主
義の段階へ日本を進めたのである。」

羽田斗争に対して、労作者はなぜベトナムによつて
国家暴力と対抗すべきではなからうかという発言
が、あちこちで言われている。しかし、今日の日本
の労組組織全体ではとりくみにくいのでなからう
か？何故なら、日本特有である労働者階級的存在
かは、こつているからである。

しかし、環反戦の同志の皆さん、悲しむべきで
はない。日本の労働者階級を掃除すべく斗争が、10
日、11日であり、これを足がかりに進行しようで
はないか。

戦術的場へ反戦のフロシ
タリヤ団結せよ！

扱われる以上、沖縄人民の最大の頼みである米軍
制、基地廃止、無条件祖国復帰は決して違つて
られることはない、むしろ日本の支配階級の根
は、沖縄基地の日本共同使用を通じ、沖縄を日本

帝国主義の海外侵略の巻頭録とすることである。
このような方向を実現するため、支配階級は、軍
事力の増強を計り、国内治安対策を強化し、これ
に国民的同意を取付けるため、利益のための国防
というイデオロギイ攻撃をかけてくるだろう。
このような侵略と抑圧政策の完政として70年安保
がある。日米会談は70年安保への重要なステップ
である。

16日の日米共同声明は、総括の項で明らかにした
如く、我々の予想が適中したことを示している。
我々はこのような労働階級に対する重大な攻撃
ベトナム侵略加担を阻止するために訪米阻止斗争
に立ちあがつたのである。

(2) 10・8から10・12へ

佐藤訪米ト、訪米阻止は、8・6広島反戦集会
で確認されて以来、全日反戦運動の最大の目標と
して取組まれて来た。とりわけ反戦青年委員会は

労働者の先遣的部隊として、先頭に立つて斗争をと確認し、全日の反戦青年委員会は至力をあつ取組んできたのである。10、8に行われた全学連と反戦青年委員会の羽田斗争は、山崎君の虐殺という犠牲を出しながら、アメリカ力のペトナム侵略と日本政府の戦争加担に反対する日本の労働階級の抗議の意志を全世界に示したのである。佐藤侵略政府の威威は著しく下り、ペトナム侵略反対の世論は急速に高まり、10、21日派統一行動は、日本、アメリカをはじめ全世界で空前の高まりをみせた。日本においては、本年最大のデモとなった全日各で新たに反戦青年委員会が結成され、10、13、10、21、11、9の反戦青年委員のデモは急速にふかれていった。勿論、このことは簡単に運んだわけではない。支配階級のマスコミを総動員した10、8斗争に対する非難、世論操作、共産党の「左翼」とは思えないう誹謗に抗して、10、8斗争の意義を説き、山崎君虐殺の真相を明らかにしつつ、地区反戦や社青間に結集する先遣的労働者の献身的努力によつて、マスコミのキャンペーンをね返り、訪ベトナムに戦へて、入りにくいといわれ

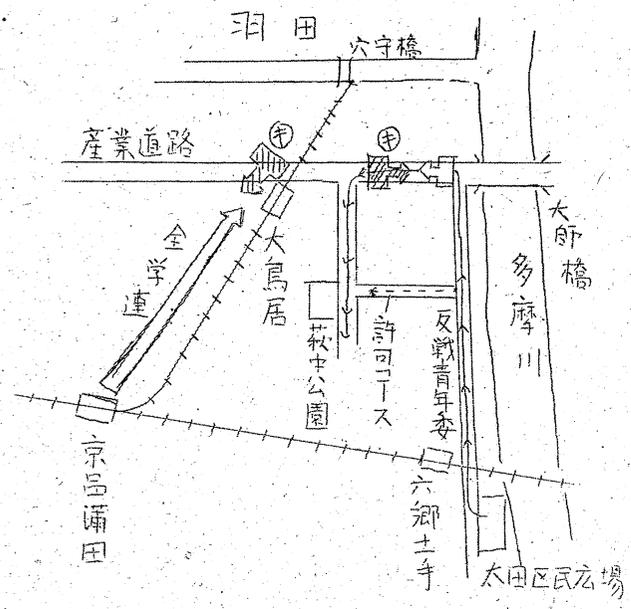
た佐藤詔米反対の重要性が徐々に組合員の間に情宣されていったのである。大阪においては10月下旬の全大阪反戦代表者会議で、羽田斗争の取組と全日反戦への取組要請が決定され、北大阪反戦の11名派遣決定を先頭に、各地区反戦、職場反戦は次々と10、8を上回る派遣決定をかちとつて行つた。我々堺反戦も11、の決起集会を契機に6名が羽田斗争に参加することになった。11月7日、全日反戦代表者会議は待望の羽田斗争を決定し、全日各地区反戦に動員を要請した。国労をはじめとする青年部は組織動員をかけた。

(3) 羽田の闘い

かくて12日、日比谷野外音楽堂には予想を上回る8千の労働者、市民が結集した。その主力は東京各地区反戦をはじめとする全日各府県の反戦青年委員会の労働者であった。

この日の前夜、74才の老人田比さん人の捨身の抗議は全日本の労働者、人民に深い感銘を与え、それは12斗争の火蓋ともなった。既に全学連は東大泊りこみによつて行動を開始していた。

この日羽田周辺のデモに参加した労働者、学生は、反戦青年委員の四十をはじめ、全学連三千、平連その他の市民、学生団体二千、そのほか空港テッキに抗議の見送りを行つた社共両党の一千人計一万八千人。これに対して政府官権は羽田周辺の産業道路に防衛線をしき、機動隊七千を配置、さらに予備隊として一万三千、更に二万の警官を配置し、装甲車野四三六台を動員して空前の弾圧体制をとつたのである。



< 羽田周辺デモ見取図 >

全学連と反戦青年委が申請した秋中公園↓穴守橋へのデモを公安委員会は不当にも許可せず、反戦青年委員のみは羽田から5キロも離れた六郷土手を起点とし、秋中公園まで、彼等の防衛線、産業道路に触れないコースを認めたのである。反戦の部隊四千はともすれば弱腰になりがちな全日反戦幹部をつぎあけつつ、許可コースの阻止線を突破して、官権の防衛線である産業道路に突入し、二千余の機動隊と対峙した。その頃京浜浦田駅から産業道路へ実力斗争を展開した全学連は、反戦青年委員の隊の三百メートル先で、機動隊の催涙ガスと警棒の乱打による弾圧と激しくつづけていた。ヘルメット部隊百名を先頭にたてた反戦デモも、二千の警棒をかまえた機動隊の阻止線を、一部東京反戦の突入にもかかわらず、ついに突破することが出た。機動隊の併進規制(サンドイッチ)にあって流れ解散の憂目にあつた。既に六時であつた。威力の暴力の前に、これをつき破る闘いを展開出来なかつた思念だが、これでは駄目だという思いと共に、反戦デモ参加の大坂派遣団六〇名の胸中にわだかまりとして残っていた。

12 斗争の特色は反戦斗争の主力部隊である労働階級の盛上りである。それは羽田テモ参加者が10、8の千五百から11、12には四千と増大していることにはつきりと表われている。しかもそれは総評の岩井事務局長が「佐藤訪米には賛成も反対もしない」という全く事態の本質を明らかにしない態度、そして総評幹事会が「羽田行動は行わない」と決定するという指導部の譲った方針にもかかわらず、下からのつぎあけによつて、単産青年部は日比谷集会に参加したのである。総評の規制によつて全日反戦のテモは日比谷↓新橋まで、羽田テモは関東各県反戦プロック主催という形をとらざるをえなかつたにもかかわらず、新橋駅前解散した組合動員の労働者は自発的に地区反戦部隊に入つて羽田テモに参加したのである。そしてこの羽田テモの主力をなしたのは東京各地区反戦をはじめとする全日各地区反戦に結集した労働者であつた。全日各地区反戦は、今や親組合の組織動員によらずとも、独自に斗いを展開しうる部隊にまで成長したのである。そしてこれこそ70年安保を、武力の治安攻撃にひるむことなく斗いの

る労働者部隊の中核が形成されはじめてゐることを示すものであり、10、8斗争が切り開いた状況のもとで10、12斗争にいたる組織活動があつた最大の成果であるといえよう。

(4) 羽田斗争の意義

① 11、12斗争の羽田週辺に結集した一万人の労働者、学生の斗いは、堺における「討議資料」づくり、職場における話し合い、カンパ、11、8堺反戦決起集会、11、9全大阪反戦集会、テモ、全大阪反戦六〇名羽田派遣にみられる如く、全日における同様の各地区、各組合内の反戦青年部の活動の積上げによつて結集したものである。それ故それは全日のベトナム侵略に反対し、佐藤政府の侵略加理に反対する広汎な労働者、人民の有形、無形の支援に支えられ、全人民の訪米反対の意志を多かれ少かれ結集した斗いであつた。そして全学連の果敢な斗いを頂点とする羽田斗争は、日本支配階級のベトナム侵略に対する事実上の参戦口北に真向うから対決し、ベトナム人民、アメリカ人民との斗いの国際的連帯をかちとつたことを高らかに示すものである。

② この鋭い斗いの前に、七十の機動隊に守られなければ訪米を實現出来ない事態は、佐藤政府の威信を著しく傷つけ、「利益の海の海外進出」の名のもとに国民世論を結集しようとする彼等の意図はその出鼻をくじかした。そして全学連に対する10、8の山崎君虐殺につづく警棒の乱打とハ〇発の催涙弾使用、大量逮捕の血の弾圧は、かくまでも訪米を強行する自民党政府の意図の深さを全国民に暴露したのである。

警棒による重軽傷者数百を加えると共に、マスコミを使つての「暴徒」キャンペーンをくり広げている。しかし、我々の民主勢力内部にも全学連の行動についての批判、誤解があるので、ここに私の意見を述べておきたい。10、8斗争を「反動勢力」と反革命勢力の衝突である（へ赤旗）とのべ山崎君の死について「学生が学生をむき殺した」から当然の報いだという警視庁と同じ見解をとつた共産党、民青の諸君は相かわらず「暴力学生追放」を気狂いじみて叫んでいる。彼等は10、8当日、羽田ではない所で五万人の「赤旗」祭りを行

③ さらに、弾圧の嵐をついて敢行されたこのテモは、全国民の前に佐藤訪米の重大さを伝え、羽田テモを支持するとしなにかかわらず、ベトナム侵略への広汎な国民的関心を呼びおこし、自民党政府の望む国民の政治的無関心からくる政府の権威への服従的・政治的安定の状態を打ちこわした。今や、政治的関心↓ベトナム侵略反対は国民のうち広汎に浸透しつつある。

斗いの日にお祭りを行う団体と化した異常精神の持主か何を叫ぼうと論外であると考える。また、いつまでもこんなことを続けていると先進的労働者、学生にますます、見はなされ、自衛「前衛」の看板が泣く泣くだるうことを彼等のために注告してお

(5) 全学連の斗いの評価について

11、12羽田斗争を最も果敢に斗つた全学連について、当然のことながら支配階級は、破防法の適用を準備し、未曾有の大弾圧（三三三三名の逮捕者

羽田斗争に参加した我々は、産業道路上で棒を構えた機動隊の壁に前進を阻まれ、解散させられた

時、この**力の壁**に挑んだ全学連に強い威銘を憶えたことはたしかである。安保以後、**戒勸隊**の素刀を使つてのテモ弾圧は日増しに強化し、テモ本来の姿である**戒勸隊**は戒勸隊のサンドイッチ規則によつて西側からびぐるけるの暴行を受けてきた。時に東京では素手のテモに常時**浪棒**が使用された。多数の**労働者**が、学生が頭を割られてゐるのである。本年五月二八日の砂川斗争では岡山大学の宮崎君が脳天を浪棒で打ちのめされ、一命をとりとめたものの再起不能で病床に伏せてゐるのである。そして10、8にはついに山崎君が警棒の犠牲となつて産殺された。このような**戒勸隊**の苛酷な連年の前に退くことなく**闘**を維持しようとするれば、みずからの生命とテモそのものの維持のためヘルメットと棒切を持つて自衛するのは当然である。それは七年前、**三池斗争**の最中、久保さんが殺された時、**三池**の**労働者**が、一夜にしてヘルメットと浪棒を手にして**闘**を維持したのと同様である。我々は**国家**の**弾圧**体制がここまで来ている事実を看過すべきである。我々はこのような**力の不当な弾圧**にひるむことなく、**ベトナム**人民

の生命を賭した**闘**いに呼応して、**ベトナム**侵略に加担する佐藤政府に身体をかけて**闘**つた全学連三千の学生の勇敢な行動と、この斗争を保障するために、全日の大学で、数多くの学生の参加のもとに、徹底して行われた政治討論による意識の高さを高く評価し、これに学ぼうはならないのではないだろうか。
彼等は**自己**の**持てる力**を最大限に發揮して**闘**つた。そしてそれが彼等の力の限界であることも知つてゐる。これ以上の**闘**いは**労働者階級**のみが持つ最大の武器、**ストライキ**による**軍需物資**の輸送、**生産の阻止**を待たねば**反配階級の侵略**加担を止めることが出来ない。彼等は思ひ上つてゐるわけでも**暴走**してゐるわけでもない。街頭でしか**闘**つことの出来ない自分達の全存在を賭けて、**労働階級**の**決意**を期行しつつか一鉢**斗**つたのである。羽田へ向う彼等のテモは「**反戦青年委員会**と共に**闘**うぞ」とまるで**恋人**を求めようかにシユスレマセコールをくり返してゐたといつ（朝日ジャーナル）
彼等は今日の**労働階級**の立憲制と困難な状況を理解してあり、その中で**道路**を用こうとする**反戦青年**

耳委員に絶大な期待をかけてゐるのである。二の期待に恥えることこそ、**全学連**のみならず**全人民**に對する我々**労働階級**の任務ではないだろうか。

全学連の戦術について批判する声は強い。しかし、彼らの突出した**闘**いは、**戒勸隊**を彼等の周囲に引きつけ、日比谷から新橋にいたる**反戦青年**の大規模なツタがテモを可能にしたのである。さらに我々のテモが、容易に**一阻止線**を突破して**産業道路**にまで出ることが出来た**阻止線**の手薄さも又、同じ理由からである。我々の戦列の中の一部隊の突出した**闘**いは必らず他の部隊の**闘**争を高め、**全体**として**闘**いを昂揚させることは世界の**階級斗争**の歴史が、**直**には**反戦斗争**の経験が示してゐる。

「**反戦青年委員会**は、**斗争**形態を異にしたといえ、**全学連**や**平連**の学生、市民とともに、身をもちいて**闘**い抜いた羽田斗争をだんこととして擁護し、これを継承せんとするものである。」へ大阪**反戦討論集**、**基調報告**より」

108以後の流動状況、**反戦**テモの膨張は**全学連**の果敢な**闘**いの反作用である。マスコミの「暴走」キヤンペインにもかかわりず、時の**経過**と共に支持者は少なくなつてゐる。12月号のほとんどの論議は大半が108支持である。そして「**反戦青年**委よりは**健康**だと言われる**平連**の代表者の一人、**鶴見俊助**は述べてゐる「もし、十一月十二日の当日、みんなの人々が佐藤首相の**アメリカ**行きを、**二**に「わらって送

佐藤訪米の「成果」と我々の斗い

高田 幣 貞ハム

一、日米公使談話の「成果」と我々の
視点

11月12日、2万の警官隊に守られ、一万余千のデモ隊に猛烈な弾圧を加えながら、佐藤首相は拜田を参り、アメリカを訪問した。そして、11月16日、日米両政府の公談の結果として、「日米共同声明」が出され、日本の進むべき道が示された。

共同声明は、①沖繩の返還は、70年安保に向け日米協談を設け検討する、②小笠原については一年以内に日本に返還する、③具体的決定以外は至て、日米両政府のミッド政策、ことに軍事、外交政策の共同目標と役割の基本方針を明らかにしたものであった。政府の言う「成果」が果して国民にとって長期的にどのような影響をもたらすものか、声明に示された日米両政府の基本方針からは、ネジリとらえねばならない重要な問題である。又、国民の、沖繩の米政返還・米軍基地撤去の即時実現の要求と、今回の日米公談の「成果」の面

の大きな入り目も、日米両政府の「成果」極東の「市民保障体制」としてに於ける日本の積極的役割という基本方針によって、その溝は埋められていくのである。したがって、国民はいつまでも政府に期待をかけ、それが裏切られるといふくりに返しをつづけるのではなく、政府、独占資本の進めている「市民保障」政策の軍事、外交政策を、ネジリと語り、それを批判し、変更させていく斗いとくまねばならない。

二、日米公使談話と沖繩

返還

日本の政府、独占とアメリカ政府の共同のミッドに於ける市民保障体制の軍事外交政策とは何か。第一に、中ロ社会主義体制を封じ込めること、第二に、アメリカ軍とそのカライライ政府によって支配されている他のミッド諸口の、反帝民主、民族解放戦争を弾圧すること、第三に、この二つの目的のため、日米両国が資本、政府が協力するこ

とである。

今回の日米共同声明は、日本政府がアメリカの産めこいる、ベトナム侵略戦争と、中ロ封じ込め政策(反共軍事同盟の強化)、ミッド人民に対する日本独占の共同支配に対してアメリカと同様の関心と利害の一致をたつものであることを確認している。従って、沖繩は、ミッド支配の軍事的地域が下まき、そのような目的の戦略的基地としての「必要」ならぬのである。沖繩がベトナム戦争を果している米軍にとっての役割を考えると、ベトナムのことであるのだ。

二のような日米両政府の、ミッドに於ける市民保障体制の軍事体制の基本方針と、そこに於ける沖繩の軍事基地の侵略基地として役割の評価の下で、沖繩返還は、次のような形で進められようとしているのだ。

アメリカのベトナム侵略戦争が勝利するまで(ベトナム人民の斗いの前にはそのようなことは早くありえないが)、兵器の生産に伴う、又アメリカの戦況の変更に伴う、沖繩の基地としての意義の低下が求たとき、返還の時期とするといふものである。この

アメリカの消費筋の途は10年後といふほど短くなる先のことを意味している。

あるいは、日本政府が国民を「教育」して(平和主義や核武装反対の国民の意識をかつく)て、米軍の基地の自由使用や核兵器を認めさせることができるか、米軍に代って日本の自衛隊が米軍の清掃りをできる程、軍事力を強化するまで、沖繩をアメリカの支配下に置くとするものである。

つまり、沖繩を日米共同のミッド支配の軍事基地とする方針を堅持し、その役割を米軍から日本軍に長期的に移行させようとしているのだ。70年安保が、日米軍事同盟の強化、そして日本の軍事力強化のもとに、ミッドに於ける軍事役割の強化を更進しようとしている。そして、沖繩はその軍事体制に大きな役割を課せられ、軍事基地として、70年安保を与えられるというものである。今回実現された小笠原の返還も、米軍基地付であり、同時に自衛隊の配置が決定されているのも、以上の方針の下に動くものがある。

二、佐藤訪米に對する 国民の の意見と斗争

今回の首相訪米に對して、国民多くは沖繩人民の
中に多くの要望と大きな期待と批判があつた。それ
は、オーストリアの即時返還と軍事基地撤去の要求
と期待であつた。一方、批判は、首相がこの国民の
期待を裏切り、日米共、マニラ侵略のための軍事
同盟、セロヤン侵入進めようとするものである、とい
うものであつた。

11月2日、沖繩では16万人(全島97万人)の祖國
復帰要求大行進が催された。口内では、11月9、10
日、日軍統一行動が各地で行われ、首相の訪米に反
對する闘いを行った。そして、訪米直前の11日、首
相官邸の前で、戦争と反動代に進む佐藤首相の訪米
に抗議して、22人の由比さん(が)が抗議の焼身自殺を遂
げた。

二のような、要望や批判に對して、佐藤首相は、
沖繩の早期返還を約束し、訪米の意義を宣伝したの
であつた。マスコミは終止一貫、この佐藤の訪米と
意図を弁護するキャンペーンを大々的に行つて首相
を助けた。

政府、沖繩返還と基地撤去の要求をいかにした
めに、マニラの安保体制へ反共軍事体制への宣伝
し、イデオロギー(軍国主義思想)の攻撃を及ぼして
きた。

政府、独占のセロヤン保に至るマニラ侵略と反
共軍事体制の諸政策をなすにせよ、それを阻
止しようとする闘いとして、11、12佐藤訪米阻止斗
争が展開されたのであつた。

とりわけ、羽田での斗争は現場配置7000名
予備一万余三千名の警備隊は兵力阻止をなされて斗
った日軍連と日軍反戦のデモ隊に向け、最初から
ケイ棒、催涙弾、無差別逮捕という猛烈な弾圧を
及ぼしてきた。日軍連3000、反戦5000名は
それぞれ列別に羽田空港へ向け闘い、ヘルメット
、棒をもった日軍連は果敢に闘ったが、多くの負
傷者と逮捕者(三三三三三)の犠牲を出した。

一方、社会党、共産党は空襲テッキで静かに行
説したのである。そして、10日に引きつづく羽田
兵力阻止斗争が、政府とそのオーストリアとなつた
デモ隊の集中攻撃の的となつた時、社会は動
揺し、社会党は政府批判をひたすらし、共産党は

この斗争に敵対する態度を支配者と支にとるものであ
つた。

訪米が終り、日米共同声明が出され、期待を裏切
られた国民は、羽田に於ける兵力斗争に對して動搖
とセロヤン安保の意味について真剣に考え始めて
いる。そして、佐藤訪米阻止斗争に現われた、進ま
るカンパニア斗争(社共)と兵力阻止斗争の日軍連
、反戦の斗争路線の対立は、大衆の中に政治問題
を提起するとも、向いかけを發している。

四、反戦斗争の 日軍連と 沖繩返還

羽田斗争が投げかけた反戦斗争の今後の方向に
ついての問題は、決して傍觀者の立場から考へて口
ならない。何故なら、羽田の訪米阻止斗争は明らか
にセロヤンの安保粉砕斗争のオーストリアであつた。そしてセ
ロヤン保は、セロヤンの日本の方向、フェリヤン侵略
と軍隊の強化、政治反動の前、日民生活と民主主義
の抑圧という太平洋戦争へ突き進んだ日本軍国主義
の道を再び現代的に現わすかどうかを決定する問題
である。

そして、先の羽田斗争は、このセロヤン安保斗争に於
ける状況を萌芽ではあるが示しているのだ。すなわ

ち、政府独占のマスコミと行政諸機構を使つた圧
力的な宣伝、教育、又暴力装置の活用、そして取
扱における資本の支配という状況の下で、安保阻
止の運動は、一方で反対声明とカッコツケのため
のカンパニア集會、又説教内における熱力な抗議
の叫びをつづける部分と、他方で兵力阻止に向け
あらゆる弾圧と攻撃をはねかえし徹底的に斗争部
隊である。

ど二かの国の斗いである前衛党が言つ如く、街頭
で警備隊と物理的に衝突することのみが真の斗い
ではない。しかし、このような批判も、真に斗い
た者のみ言つことのできる。それが闘いをソボル
口実としてのみ言われるなら、まさに人民に對す
る裏切りである。労働階級の最大の武器は言つま
ひもなく、セネストである。セロヤン保は、支配
者、独占の存立をかけた攻撃である故に、我々は
このセネストの實現を最大の目標としなければな
らない。セネストが労働階級の最高の斗争形態で
ある故に、それ以前にそれに至る至る可能な斗い
を日とることなく、兵力をもつて闘つてはめて
この難事を成し遂げることである。

編集後記

11.12斗争が終つて既に半月以上経つた。この報告集を火うず完全な仕上げようと考へたのは、何よりも、あの斗争の経験を多くの人に深く刻みつけてもらいたいという強い願望があったからである。

拜田での、数千の武装した警備隊を前にした時のあの恐怖と動揺は、威力とはこれほどまでに固いトリアに守られているものな、という驚きであると共に、政府に立ち向う我々の部隊がこれほど多くの安保斗争以来最高に結集しているから、何故、勇敢に斗いえないのかというもどかしさであった。生半可な態度や準備では、決してあの警備隊の厚い壁は破れない、もつともつと固い団結をもって、斗いを挑まねばならないという教訓であった。七〇年安保斗争が迫っているにも拘らず、多くの人は、二の力関係のへだたりを知っていない。至全国各地から集った反戦の同志は一律にこのこと肝に命じて日夜斗いをつづけていくであらう。

一九六七年二月二十九日

へまへ 生口

場反戦兵団総括集

場反戦を結成して、一年がたとうとしている。ベトナム反戦、砂川基地拡張阻止、八月広島反戦集、佐藤首相の南ベトナム、アメリカ訪問阻止など、いろいろな課題を呈力上げて闘ってきた。そのうちに、我々の内部に多くの曲節をこけて、二三月まで到達した。七〇年安保に向けて、八月、一万人の発展させていかなければならない。場という、新興工業都市で、呈体として在野的な意識に田州でいる中で、一貫して大胆に社会矛盾に挑戦する青年労働者の斗いである。我々場反戦の任務は非常に大きい。長期的展望のもとに我々の問題点を診談し、克服し進固な斗争部隊に成長していかなければならない。

日時、12月中旬

11.12斗争、報告、総括
発行—場反戦青年委員会
1967. 11. 30

価 20 円

11.12 斗争、報告、總結

発行— 界反戦青年委員会

1967. 11. 30

————— 価 20 円 —————